

2020年10月11日 佐土原教会礼拝説教

聖書箇所：ヨハネ福音書 12章 27～36節

説教題：御心を歩む

イエス様を信じるユダヤ人の方の証を読んで驚きました。彼のお父さんは、戦前ポーランドにあったユダヤ人社会でラビ(律法の教師)として働いていましたが、ラビの訓練は凄まじいものだったそうです。ラビになる人は13歳までに「モーセ五書」をヘブル語で暗記しなければならず、18歳までに「旧約聖書」をヘブル語で暗記しなければならず、21歳でテストがありました。そのテストでは、試験官があるページのある文字を指します。例えばそこに針を刺すとして、その針が突き抜けて行く全部のページの文字を言わなければならなかったそうです。ユダヤの人々の神の言葉に対する熱意(執念)、これが「旧約聖書」を3000年、守って来た要因だと思いました。「神の言葉」をいかに大切にするか、教えられる気がします。

前回はイエス様の許にギリシャ人が訪ねて来た話でした。今日の箇所は、それに続いて為された主のメッセージです。ヨハネはこれを通して、神の御心を歩もうとされるイエス様の姿を伝えます。その意味で今日のテーマは「御心を歩む(主に喜ばれる道を歩む、喜ばれる生き方をする)」ということだと思います。3つ、申し上げます。

1：「御心を歩む必要」

27節「今、私の心は騒いでいる…『父よ。この時からわたしをお救い下さい』といおうか。いや。このためにこそ、わたしはこの時に至ったのです。父よ。御名の栄光を現わして下さい」(27)。「騒ぐ」、「混乱する」ということです。イエス様は、神性と共に人間性(人間の弱さ)を併せ持って下さった方でした。だとすれば、誰が33歳の若さで死ぬことを願うでしょうか。しかも、神から引き離される恐怖を知っておられたのです。

CS ルイスの「ライオンと魔女」という童話があります。4人の兄弟姉妹がナルニア国という不思議な国に迷い込みますが、その内の1人が魔女の世話になってしまいます。彼は魔女の許からナルニア国の主人公、アスランというライオンの許に逃げて来るのですが、魔女はアスランに「あの子は私のものだ、返せ」と迫ります。ナルニアには「裏切り者は魔女のものであり、裏切りがある度に魔女は1つの命を要求出来る」という掟がありました。結局、アスランが身代わりになって自分を魔女と仲間達(魑魅魍魎)に差し出します。そこで罅殺されます。ところが、ナルニアには魔女の知らない更に深い掟がありました。「裏切りを犯したことの無い者が裏切り者のために進んで身代わりとなる時、どんでん返しが起こる」という神のお造りになった掟でした。アスランが命を捧げた時、神の掟が働いて、アスランは復活し、男の子も解放するのです。最後には魔女達を滅ぼします。

アスランは、全てを神の掟(御心)と力に預けました。魑魅魍魎に自らを明け渡すのですから、恐ろしい敗北です。でも、主に喜ばれる歩みをする時、神による勝利があることを信じました。十字架は、当時最も残酷な刑と言われた処刑です。しかしイエス様の目は、むしろ神から切り離される恐ろしさ—(CS ルイス描く霊的な恐ろしさ)—を見ておられたのではないのでしょうか。しかしイエスは「御名の栄光を現わして下さい(あなたの思い通りを為さして下さい)」と祈りを変

えられました。「神の御心が十字架であれば、その道を歩みます」と、神に喜ばれる道を選び取って行かれたのです。そして、復活された、最後の勝利を勝ち取られたのです。

私達が神に喜ばれる道を歩もうとするのは、そこに勝利があると信じるからです。「死の谷を越えて」というクワイ川収容所の話は何度もさせて頂いています。連合軍捕虜に対する日本軍の過酷な仕打ちに対して、憎しみがあつた、しかし彼らは、イエスの「自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい」という言葉に従って、傷ついた日本兵の手当てをして上げます。すると、その彼らに、日本兵が何度も何度も「アリガトウ、アリガトウ」と呼びかけるのです。それまで「バカヤロー」しか聞いたことがなかった。でも、その時、彼らは、御心に従う勝利を体験するのです。神に喜ばれる道を歩もうとすることは—(例えば憎しみを手放そうとすることは)—きつと闘いです。しかしその先に勝利があることを信じて、御心を選び取って行く信仰生活でありたいと願います。

2：御心を歩むためのツール

御心(神の喜ばれる道)を歩むためには、どうすれば良いのでしょうか。28～29節で神が答えられます。「私は栄光をすでに現したし、またもう一度栄光を現わそう」。イエス様にはこの声が聞こえましたが、群衆には雷がなったように聞えた、あるいは天使が話しているように聞えたのです。しかしイエスが「この声が聞こえたのは…あなたがたのためです」(30)と言われたように、本当は群衆がそれを聞いて、イエスの背後に神がおられることを悟り、イエス様を信じるができるようになるための声でした。

なぜ、彼らにはその声が理解できなかったのか。はっきりとは分かりませんが、人々は「神が私に語られる等ということはない」と思っていたのではないのでしょうか。だから、初めから神の語りかけを聞こうとはしなかった。聞こうとしなければ、神が語られても聞こえないのではないのでしょうか。ある人は「神は昔ほど人に語られない」と言います。しかし、むしろ私達の方が神の語りかけを聞こうとしていないのではないのでしょうか。カナダの聖書学校の先生は「7時間、静まって心を神に傾けた時、神の御心がどンドン入って来る経験をした」と言われました。聞こうとすれば、神は今も語られるのではないのでしょうか。7時間も御前に静まることは出来ないでしょう、生活が出来ない。そうでなくても、私達には聖書があります。聖書は神の語り掛けです。神が私達に語りたいこと、私達に知って欲しいと思われることが、全部聖書の中にあるのです。

ある牧師は、辛いところを数知れず通られましたが、その度に神が語られたそうです。「私はここにいる」。「イザヤ書」の御言葉です。「あなたが呼ぶと、主は答え、あなたが叫ぶと『わたしはここにいる』と仰せられる」(イザヤ 58:9)。彼だけではない、神は私達にも『私はここにいる』と語っておられるのです。しかし、例えばラジオの電波は私達のところにも届いています。しかし受信機がないと分からない。ラジオで「936」という周波数を受信した時、「世の光」のメッセージが聞こえるのです。同じように「私はここにいる」という御言葉の受信機を心に持った時に、神が発しておられる「私はここにいる」という声を受信出来るのです。私達の心には神の御心が刻まれているから、ぼんやりと分かります。でも「ぼんやり」では、導かれるということにならない。しかし私達が聖書を読んで行く時、確かな神の励ましや、支えや、示唆に出会うの

です、受信するのです。恐れがある時、「恐れなくて、ただ信じていなさい」(マルコ 5:36)という声を聞くのです。聖書を読み続けて行く中で、その時に必要な言葉がその時に与えられる、という経験もします。神が摂理的に働かれて、聖書を通して語られるのです。また祈りの中で心に蓄えていた御言葉を通して神が語られるという経験もあります。神様は、今も聖書の言葉を通して語って下さるのです。大事なのは、私達が聞こうとするかどうかです。御心を歩むために—(神に喜ばれるように生きるために)—「聖書を通して神に聞く」ことをしなければならないと思います。

そして、聞いたら、それを行いにしたいと願わされます。イエス様の「父よ、御名の栄光を現わして下さい」という祈りに答えて 28 節、神は「私は栄光をすでに現したし、またもう一度栄光を現わそう」(28)と言われました。「もう一度…現わそう」の方は十字架のことですが、「すでに…」の方は何のことでしょうか。それは「イエス様の御業」のことだと思います。見えない者の目を開き、飢えた者にパンを与え、心の渇きに苦しむ者にいのちの水を注がれた…数え切れない業を為さった、その頂点にラザロをよみがえらせるという業もなさいました。それらの愛の業を通して神は「わたしは栄光をすでに現した…」(28)と言われるのです。私達が神の御心を歩むこと、それは「御名の栄光を現わして下さい」(28)という祈りを具体的に生きることなのです。「光の子ども」として生きることなのです。

3：御心を歩む祝福

3 番目、イエス様は、御心を歩もうとする者の祝福も語られます。

1 つ目は「裁きからの解放」です。30 節「今がこの世のさばきです。今、この世を支配する者は追い出されるのです」(30)。これは「十字架は敗北ではなく、むしろ十字架によって世を支配する悪の力が負けた、負け始めた」ということを言われた言葉だと思います。悪の力は負けました。「サタン」というのは「中傷する者」という意味です。全ての人が立たなければならない死後の裁きの時、私達がそこに立ったら、サタンは我々の罪をあげつらおうとするのでしょうか。でも、面白い話があります。死後の裁きの座に着くと、サタンが、分厚い「私の生涯の記録帳」を持ってニタニタしながらやって来るそうです。私の言ったこと、やったこと、あんなこと、こんなことが書いてあるのです。ところが裁判が始まって、サタンが一生懸命にページをめくると、細かく書いてあるはずの私の罪の記録が全部消えている。サタンは言うのです。「おかしいんですよね。何も書かれていないんですよね…」。私達を訴え、責め立てるこの出来る者はもういない。イエス様が十字架で全部を消して下さいました。だから死後の裁きを恐れなくて良い。感謝です。

しかし「裁き」は、それだけではない。イエスの十字架を信じた時、神は私達を子として下さいます。神が永遠の救いの観点から私達を祝福しようとされる、それが子とされるということです。しかし、私達の方が、神に喜ばれる道に背を向けることによって、神の祝福を拒んでしまうのです。「御心を歩む(神に喜ばれるように生きる)」ということは、日々の生活で「神の祝福を失う」という「裁き」から、私達を解放して行くのです。

もう 1 つの祝福は、32 節「私は地上から上げられるなら、わたしはすべての人を自分のとこ

ろに引き寄せます」の言葉にあります。イエス様が己を虚しくして架かって下さった十字架こそが、私達をイエス様に引き寄せました。私達の感動は、神の御子が十字架で私達に仕えて下さったことです。その意味でこの言葉は「自分を虚しくして人々に仕えて行くことにこそ、人を変えて行く力がある」、御心を歩む中に人を変えて行く祝福があるということを教えるのです。以前もお話ししましたが、ある方は、かつてお父さんと激しい確執があったのです。それは、宮崎に住みたくない、実家に帰れないような強いものだったそうです。でも求道していた教会で「あなたの父と母を敬え」(出エジプト 20:12)という言葉聞いた。「『父と母を敬え』と命じている方がいる。私に命じておられる、この方が神であるに違いない」。それは彼女の信仰を導く言葉だったそうですが、そこから彼女は、自分を殺すようにしてお父さんに接して行くのです。そうしたら、やがてお父さんの方も心溶かされて、何とお父さんは91歳で彼女を通してイエス様を信じて、洗礼を受けられたのです。考えられないことだったそうです。御心を(神の喜びを)歩む中に、祝福があるのです。

4:最後に

パウロは言いました。「キリストの言葉をあなたがたのうえに豊かに蓄えなさい」(コロサイ 3:16)。今年目標聖句です。熱心に神の声を聞こうと務め、御心を歩もうとする、そのような信仰生活を紡いで行きましょう。